

浄土宗総合研究所報

1990

Vol.1

- 総合研究所案内
- 21世紀への教化



【目次】

- 所報第1号に寄せて……………2
- 総合研究所案内……………4
 - 各研究部・部長のプロフィール……………4
 - 総合研究所の組織……………5
 - 総合研究所各部の事業報告……………6
- 座談会—総合研究所の役割をめぐって「21世紀への教化」……………8
- 総合研究所・所員名簿……………15

具体的にして 有機的な総合研究を



宗務総長 大田秀三

「平成」という元号に改まった年の四月に、浄土宗総合研究所が発足いたし、既に一年を経過しました。その所報第一号が発刊されますことは感慨一入なものがあります。

申すまでもなく本宗は他宗に見られぬ教学・布教・法式の三研究所を早くから設置し、その実をあげてまいりました。

今回この三部門を相互有機的関連のもとに統合し、斯界の権威である竹中信常先生を所長に迎え、各研究部長・事務長をもって構成する運営企画会議によって基本的方向が打ち立てられております。本宗教化のあり方を二十一世紀に向って、地球的視野のもとに確立し、現代の高度情報化社会におけるダイナミックな社会機構の変革に対応する浄土宗総合研究所の果たさねばならない責務は極めて重大であるといわねばなりません。

特に高齢化・情報化・国際化社会に対し、宗祖法然上人の教えを基調とする伝統教学の今日的開頭を計り、具体的にして有機的な研究成果が本宗の総合教化施策の樹立に大きく寄与されんことを切望してやまないものであります。

身(法式)・口(布教)・意(教学)の 三業の一致



浄土宗総合研究所長 竹中信常

昨年四月一日をもって発足した本研究も本年四月より組織・人事を一応完備し、実動の段階に入った。この新発足に当り、総合研究所所報第一号を発刊する。

顧みれば、本宗における教化研究の機関は、遠く昭和十八年浄土宗教学院研究所の開設を嚆矢とし、在来浄土宗布教師会所属の研究活動を機関化して昭和五十三年四月一日その規定を制定し、昭和五十五年九月十六日、明照会館内に布教研究所の設立をみた。さらに昨年四月の本研究所の開創に伴い法学会において法式研究部が新設された。これらの機関はすべて総合研究所組織に組み込まれ、それぞれ教学研究部、布教研究部、法式研究部として統合・相合することになった。

いうまでもなく、これら各研究部はそれぞれ独自の実質と目的を持っているが、しかしそれらが個々ばらばららるる在り方では本宗教化の実を挙げることは出来ない。三者が各自の特質を持ちつつも一つの有機体として活動すべきである。素直な表現で恐縮だが、いってみれば、教学は本宗信仰の本義を理論的に研究・解明し、布教はこれをひろく

一般大衆の理解・実践に適うように宣説し、法式はこれを法儀・儀式・日常生活の上に具体的に体现する役割を擔うもので、かかる身(法式)・口(布教)・意(教学)の三業の一致こそ本宗教化の望むべき姿であり、本研究所の理想態にほかならない。そして、その実動を有機的に推進するため、事務局が併設されたのである。

以上のような趣旨のもとにある本研究所の組織・人事及び各研究部の事業計画等の実態をひろく江湖に周知して頂き、諸賢の理解と支援とを願うべく、所報第一号を編した次第である。

新しい樹液を



浄土宗東京事務所長 成田有恒

十二世紀における法然登場の意義は、ひとり宗教改革者の立場だけでなく広汎なこの国社会の精神構造に重要な問題を投げかけました。無知な庶民大衆は法然の念仏によって理想と個性に目ざめ、乱世を生き抜く道を発見したのであります。この輝かしい伝統を継承してきたわが浄土宗教団は、つねにその時代をリードする教学、実践を義務づけられてきました。二十一世紀を迎えようとする現在、その使命感はいっそう重いものと言わねばなりません。

総合研究所の発足はまさにこの要請にこたえるためのもにほかなりません。法然念仏は、揺れ動く価値観の現代

すぐそこ、21世紀…… わたしたちは、どこへ？



において、どのように位置付けされるべきであるか。教学はその軸芯を掘り下げ固定し、布教、法式はそこから生い立つ樹幹にふさふさとした枝葉を繁らせねばなりません。幸いにも初代研究所長に竹中信常博士を迎えることができました。学徳兼備、加えて博士のシャープな近代感覚はこの新樹をみずみずしい樹液で潤わせてくれるでしょう。

各研究部・部長のプロフィール

● 総合研究所案内



津田徳翁 (つくだ とくおう)

法式研究部長

大正3年東京都港区に生まれる。昭和10年大正大学卒業。東京教区教区会議員、各法式講習会講師等を歴任。現在、浄土宗法儀司、大本山増上寺教授師、同式師会顧問、同雅楽会顧問、同御忌会奉行、東京教区城南組組長、東京都港区高輪・正覚寺 前任職。



板垣隆寛 (いたがき りゅうかん)

布教研究部長

大正4年山形県村山市に生まれる。昭和8年時宗宗学林卒業。山形教区教化団長、同教区宗議会議員、山形県仏教会会長等を歴任。現在、宗教教諭師常務理事、浄土宗東北教諭師会会長、一向上人踊躍念仏同好会会長、山形県村山市・得性寺住職。



藤堂恭俊 (とうどう きょうしゅん)

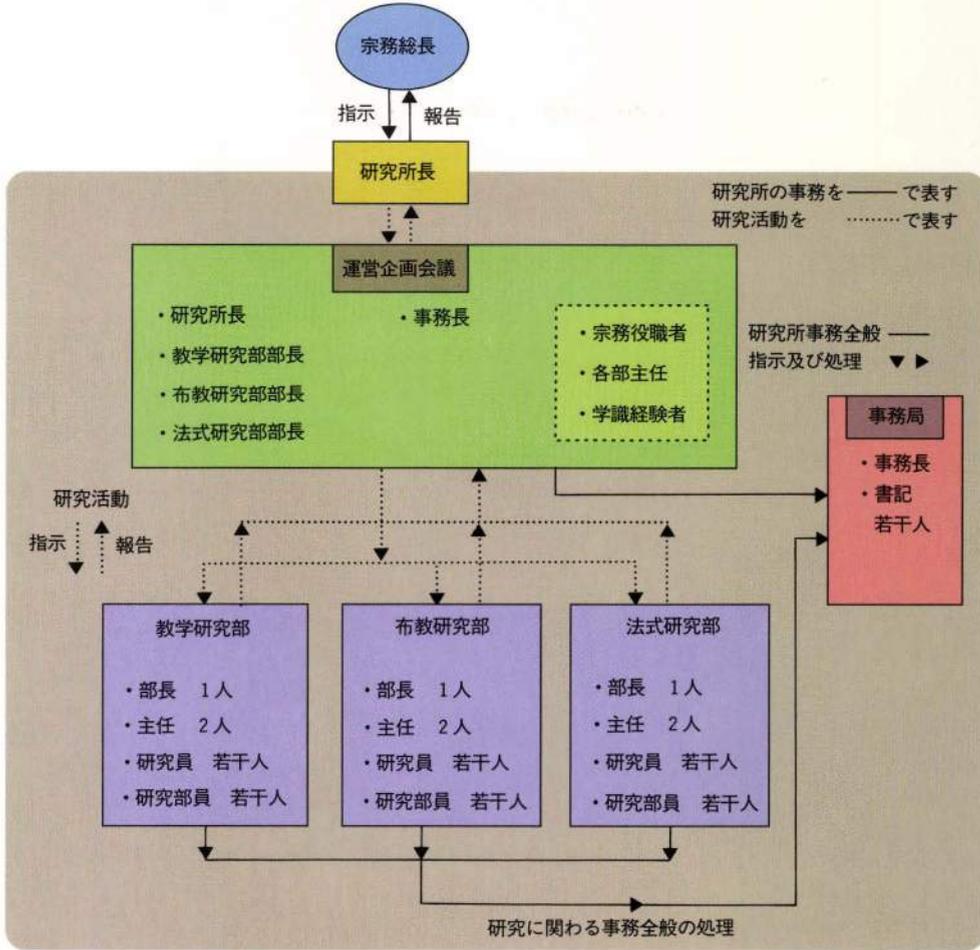
教学研究部長

大正7年和歌山県田辺市に生まれる。昭和16年大正大学卒業。佛教学部文学部長、同大学図書館長、同大学付属幼稚園長、日本仏教学会理事等を歴任。現在、佛教学部文学部仏教学科教授、大正大学講師、日本印度学仏教学理事、総本山知恩院浄土宗学研究所主任、文学博士、京都市東山区・信重院住職。



阿弥陀如来は、あなたのそばに。
そのことを、あなたは知っていますか？
汝今架不 阿弥陀仏 去此不遠（観無量寿経より）

総合研究所の組織



従来の教学院研究所は総合研究所教学研究部となり、一般事務については教学局が掌握することになった。



総合研究所がある明照会館



総合研究所各部の事業報告

教学研究部

〔東部〕

平成元年4月より平成2年3月までの活動を以下報告する。

一、公開講座

① 6月23日(金)午後3時半～5時半／明照会館会議室

「禪とキリスト教」

講師―上智大学東洋宗教研習所長・門脇佳吉先生

② 12月14日(木)午後3時半～5時半／明照会館会議室

「極楽浄土とはどういうところか―その心



教学研究部

理的考察」

講師―東洋大学教授・恩田彰先生

二、研究部員研究発表会

3月15日(木)午後2時～5時／明照会館会議室

阿川正貫―宋代浄土教における択瑛と用欽

渡辺真宏―『阿弥陀経釈』について

武田道生―都市寺院における供養儀礼の実態

〔西部〕

平成元年4月以降、平成2年3月までの活動経過は以下の通りである。

一、定例研究会

① 6月28日(水)午後2時半より／佛教大学鷹陵館第一会議室

井上智之―チベット撰述のアビダルマ文献の

研究(二)

村上真瑞―『釈浄土群疑探要』と『群疑論見

聞』との関連について

福原隆善―『往生要集』の総相観について

② 9月27日(水)午後2時半より／佛教大学鷹陵館第一会議室

東谷信昭―『安養集』の基礎的研究

梶山雄一―『大智度論』にあらわれる阿弥陀仏

信仰

③ 10月25日(水)午後2時半より／佛教大学鷹陵館第一会議室

古田彦太郎―Patisambhida-maggaにおける

Yuga-nandha-Kathaについて

田山令史―哲学的議論の型

平岡 聡―ミシガン大学留学雑感



教学研究部の研究会

④ 11月29日(水)午後2時半より／佛教大学鷹陵館第一会議室

竹内真道―「動き」と「固定化」―「弁中辺論

とデカルトの思想をもとに

横田善教―最と慧命の教学について

吹田隆道―賢劫の仏陀について

二、共同研究

「浄土三部経の末書および原本の総合的調査

ならびに研究」を坪井俊映勧学を中心に共同

研究中である。

三、特別講演会

5月31日(水)午後1時より／佛教大学鷹陵館

第一会議室

「新羅僧 道説 禪補思想の密教的源流」

講師―韓国東国大学教授・徐閔吉先生

布教研究部

【浄土宗教学布教大会】

平成元年年度の浄土宗教学布教大会は、平成元年度浄土宗布教師中央研修会と第35回浄土宗教学大会との合同大会として、平成元年9月6日(水)～8日(金)までの3日間にわたり、東京の大正大学を会場として開催された。一般研究発表のうち総合研究所布教研究部関係の発表は左記の通りである。

石割顕昌「布教への試み——和歌の効用について」

土屋正道「現代と布教——浄土宗東京教区青年会国際救援活動について」

山口隆誠「生きるということ」

小田芳隆「青少年と宗教教育について」

漆間宣隆「自坊に於ける教化の試み」

阿部信之「在家仏教が今かかえる問題点——布教者としての立場から」

佐藤雅彦「仏教と生命倫理(Ⅱ)」

意見発表は大会三日目に行なわれ、テーマは昨年に引き続き「現代人に極楽をどう説くか(Ⅱ)」で行われた。内容は「教化研究」一号に収録した。

【集中研究会】

総合研究所布教研究部の集中研究会は、研究所の関係者全員を招集して、年2回開催した。平成元年度は左記の通りである。

●第1回／平成元年6月2日(金)／明照会館

①講義「現代と布教」布教研究部長・板垣隆寛師 寛師 布教研究部主任・宮林昭彦師

②講義「現代と布教」のテーマのもと、参加者によるディスカッションを行った。

②その他

板垣部長より総合研究所発足にともなう布教研究部としての本年度の研究指針、研究推進に関する指導があり、さらに本年度の事業計画の説明、教学布教大会への参加発表についての説明、打合わせ等を行った。

●第2回／平成元年11月28日(火)～29日(水)／大本山善導寺

①研究発表／研究部員として二年目をむかえた石割顕昌・長尾隆道・土屋正道・佐野純雄・阿部信之の各部員がそれぞれの研究テーマに沿って発表した。

②講義

「五重相伝について」大本山善導寺法主・藤堂俊章台下「現代教化の問題点」布教研究部主任・宮林昭彦師



第二回集中研究会は布教師会九州支部にも参加を呼びかけ実施した。開催にあたっては布教師会九州支部長・熊谷靖彦上人に多大の御配慮と御協力をいただいた。

【月例研究会】

月例研究会は「教典に学ぶ」というテーマのもとに左記の日程・内容で東京・京都を会場に実施した。

●明照会館会場

6月19日(月)／梵網経(Ⅰ)

大正大学教授・布教研究部主任 宮林昭彦師

7月20日(木)／梵網経(Ⅱ) 宮林昭彦師

10月7日(土)／往生論(Ⅰ) 佛教大学教授

藤堂恭俊師

11月18日(土)／往生論(Ⅱ) 藤堂恭俊師



布教研究部の研究会

●佛敎大学四条センター会場
般舟三昧経 佛敎大学教授 梶山雄一師
(以上「布敎資料」第四集「敎典に学ぶ」
に掲載)

〔浄土宗布敎師大会〕
平成元年度浄土宗布敎師大会は、平成元年7
月4日(火)・5日(水)、滋賀県大津市「ホテル
紅葉」他を会場に開催された。布敎研究部から
は板垣部長、岡崎・西岡・長谷川・佐藤・市川
の各研究員が参加した。

〔各宗敎化関係研究機関連絡協議会〕
各宗の敎化関係の研究部が、毎年一度、情報
や意見を交換しあう連絡協議会が平成2年2月
6日(火)、池上本門寺朗峰会館で日蓮宗の担当
で実施された。本年のテーマは「過疎地寺院問
題を考える」であった。

〔「敎化研究」「布敎資料」の発行〕
布敎研究部が「布敎研究所報」として発行し

てきたものを『敎化研究』とタイトルを改め第一
号として発行した。また、月例研究会の講義
録を編集し、「敎典に学ぶ」と題して『布敎資料』
第四集として発行した。

法式研究部

ここ十数年間、法式研究所は当局の要請によ
る『浄土宗法要集』の改訂出版と浄土三部経の宗
定読誦法の制定に取り組んできた。

そのうち「法要集」は「威儀部」の刊行と、
その理解を助けるためのビデオテープの制作を
終わった。現在「音声部」は洋楽譜併記による
改訂版の出版、「差定部」「偈文集」「表白宣疏集」
の編集に当たっている。

三部経の読誦については、経本は消耗品であ
る。との言の如く、底本となるべき古本は皆無
に等しい。このため疑点の指摘はできているが、
最終決定の段階で停滞しているのが現状である。
しかし眼を周囲に転ずれば、法式として再考
しなければならぬ問題が山積している。

先徳が苦心して作成された諸種の講式、比丘
の必須科目であった半月布薩や広布薩、放生会
等、先の『浄土宗聖典』に収録されている特殊
法要は、ほとんど中断されたままである。実修
された古老の記憶をたどり、早急に復元を図ら
なければならぬ。多くの芸能の源流となった
各地の節念仏も、伝承された古老の死とともに
絶滅するであろう。一日も早く、収録保存の方
法を講じなければならぬ。

さらに現在われわれが行っている法要につ
いて、檀信徒はどんな感じをもって参列してい
るであろうか。偈文も経文もほとんど理解でき
ぬであろう。ただ呪術的なムードに浸っている
だけではないだろうか。それを執行している僧侶

の威儀作法や音声など、どれも信仰心を開発す
るには程遠い感じがする。しかもそれが少しの
反省も疑問もなく繰り返されている。敎理と儀
式は宗教の二大要素」とか、説法と法要は伝道
の両輪」と口には言うが、われわれも宗門も、
法式に関しては努力が足りないように思う。

経文や偈文の現代語訳、表白宣疏類の新作も
是非進めなければならない。それよりも先に、
せめて別回向の文だけでも聞いて分かる言葉
にしてもらいたい。「お勤めの中で分かったのは
故人の戒名だけであった」との信者の声を、も
つと真剣に聞かなくてはなるまい。

右のような考えから、法式研究部は

○広布薩の研究と復元
○日常勤行式の再検
○(古典法要) 臨終行儀の研究
○声明と音楽

の四項を取り上げることにした。
しかしどれも大きな課題であり、諸についた
ばかりである。

諸師の御協力を得て成果を挙げたいと願って
いる。



法式研究部の研究会

21世紀への教化

【出席者】



総合研究所長
竹中信常



教養研究部長
藤堂恭俊



布教研究部長
板垣隆寛



法式研究部長
津田徳翁



浄土宗東京事務所長
成田有恒

【司会】

新しい時代には新しい宗教の表現

●総合研究所の展望

成田 本日はお忙しいところ、ありがとうございます。

これから21世紀への教化ということは、わが浄土宗として、きちんとした基本を打ち立てておかないといけない。教養・布教・法式それぞれの部門で、その基本をどう構築するか。このへんのところからお話ししたいと思います。

竹中 御宗門からの御要望、われわれサイドからの希望といったものが実りまして、従来の教学院研究所、布教研究所、法式研究所を有機的に結びつけたのが総合研究所ですが、私自身、一つのアイデアをもってあります。仏教では、よく身口意三業といいますが、身とは身体での行

動面で、これが法式にあたります。口は大衆にたいする教化・布教。意は心ということで、これが教養。この三つの側面が一体になって、しかも実際に働かなくてはならない。御宗門からの御要望に具体的に応えていかななくてはならない。そこに「医療と宗教」などの研究プロジェクトがあるという現状であります。

成田 藤堂先生、特に教学ということですが、いかがお考えですか。

藤堂 時代はなるほど変わっていくわけですが、人間はさほど変わらない。ただ、現代は人間が作り出したものによって人間自身が大いに汚染されておる。この汚染をどう克服し、どう清浄化していくか。

それが私たちの課題ではなからうか。汚染の根源を私自身とするのが信機ですね。

成田 ヨーロッパやソ連で大きな変化が起こっています。社会経済的な背景はさておき、神の存在、仏の存在を否定してきたマルキシズムに対して答えが出たのではないか。しかし、宗教の側も時代にに応じていく必要がございます。21世紀の人間にアピールできる新しい布教の方法、板垣先生、それについての御意見を願います。

板垣 生きている私たちが救われなければ宗教の存在価値はありません。極言すれば、生身の私、現在の私が救われなければなりません。これが根本的理念。そして私らは、お念仏が中心であります。お念仏を申せば、祈らなくても救われるということを強く前面に出すべきではないか。

その場合に、現代にアピールできる浄土教でなければならぬ。私どものほうに最上川という川がある。その流れは不変でありますが、しかし、水はたえず去っている。サンズイ(偏)に「去る」と書いて「法」と読むんですね。本質や真理は変わらなくても、表現は時代と共に変わっていかなくてはならない。その点で今後、教学や法式の方々から、いろんなことを教えていただきつつ、私たちにも第一線の活躍の場を与えてもらえれば、たいへんありがたいと感じています。

成田 津田先生、教えを現代にアピールするには表現を変えていく必要があるというお話でしたが、その点、いかがでしょう。

津田 法式での将来への展望を考えると、表現方法を変えようというよりは、むしろ工夫をしてゆく必要性があるだろう。たとえば教える立場の教師について言えば、従来の口伝のみによる指導では不足ではないか。わかりにくさを解消する意味で写真やビデオを用うるのも一つの方法であろうし、教化される側の檀信徒への対応としては今一層わかりやすい勤行式の解説書や手引を対機的な指導とあわせて用うることで、現代に相応してゆけると考えている。もちろん、これらは法式の基本的なあり方を根本的に変えてしまうという意味ではありません。

これからの宗教の課題は何か

●医療と宗教のあいだで

成田 今、一言ずつ御発言をいただきました。総合研究所の理念とか目的については一応、語られたかと思いますが、ここで、当面の課題であります「医療と宗教」というテーマに話題を移したいと思えます。

実は昨日のことですが、ガンで四十歳で亡くなった人のお兄さんと話をしました。お兄さんはお医者さんなんです。本人にガンを告知しなくて良かったとおっしゃる。もし本人に告知したら、「おふくろには言わないでくれ」と言うにきまつている。それにまあ、最期まで治るという希望をもっていたから、私の感じとしては、やっぱり本人に知らせなくて良



かったという。

ガンを告知する場合、日本では家族に告げても本人には知らせないのがこれまでの常識です。しかし、アメリカは逆。本人には告知しても、家族には教えない。これは、どっちかなんですね。本人に告知すれば身内の者に教えないでくれと言うにきまつてますから。

われわれ宗教者としては、こういう問題にどこまで踏み込んでいけるものか。医療と宗教というのは、そういう問題でしょうね。

竹中 医療と宗教といえば臓器移植の問題もある。私は臓器移植も結構だと思う。しかし、あれは人間に対する生物学的な



処置であつていささかも心の中に入っていない。

ガン告知の問題では、われわれの大先輩の岸本英夫先生が五年間に四十何回も手術を受けて、最初から自分がガンだと認識して、それからのほうが価値ある仕事をなさった。そういうケースもある。ですから、この問題は、場合に應じるというふうなことです。

板垣 家族と当人のどちらにも教えないという方法もあるでしょうね。言わなくても態度で感ずる場合も往々にしてあるから。

竹中 そのあたりは臨機応変ということでしょうねえ。いわゆる生物学的生命、これはもう、お医者さんでなければどうにもならない。しかし、もう一つの命、人間としての本人の生命意識は、われわれが力強くケアしていかなくてはならな

い。死期をさとした人であればそのように、また、生きる望みをもって療養に努めている人には、やはり望みを。臨機応変に、宗教者として心の中へ分け入っていかなくてはならない。基本的な生命の尊厳というものが、どう死ぬべきか、どう生きるべきかという問題になると、お医者さんでなく、われわれでないと対処できないでしょう。

藤堂 ガン告知の問題で岸本先生のお話がありましたけれど、それだけの平常心ができていくかできていかないか。この問題です。このあいだも、ある女性がお念仏のおかげで動揺なく手術を受けることができたと言っておられました。この人の場合は、平生、お念仏をしておられたという関係もあるでしょう。

臨終については三種の愛心があると、よく言われます。病気による身体的な痛

み、家族や遺産のこととか、自分の生命に対する執着、死後どこへ住くかという精神的な苦悩が入れ代わり立ち代わり心をさいなむ。それに対して、いわゆる阿彌陀如来の来迎がある。阿彌陀様の姿を見、感じることによって、散り乱れている心がそこに集中されるから、苦悩は消える。これは心の問題ですから、どうしても心を養うということが大切になりますね。

竹中 だから、心を語れるお医者さんではないとね。われわれも病気についてもうすこし研究をし、同時にお医者さんに説教すべきだと思うね。

板垣 お医者さんは肉体だけ見て、心というものを見ていないような気がする。現在の医療は死ぬまでやっている。ところが、もう止めてくれという場合がたくさんある。それでいいのかどうか。

私のところの檀家で、「うちのオヤジがそろそろだめになった。そして今和尚さんが来てくれるからお医者さんを断つたから、和尚さん、来てくれ」と言ってきた人がいます。私は仏壇にお参りして、こう言っただけです。

「一緒にお念仏しましょう。そうすると、阿彌陀様は必ず極楽に連れていってくださるから、なんにも心配する必要はない。ただ、おまかせするんだという気持ちで、ゆっくりと十遍お念仏をとえましょう」と。もう弱って、目も開かないし声も出な

い。口真似だけで十遍お念仏をとなえました。最後に日課数珠をあげて、「これをする」と阿弥陀様は必ずあなたを丈夫にしてくださるから、あなた、丈夫になりなさい。こう言っただけで帰ってききました。

それから一か月たっても二か月たっても、死んだという通知が来ない。お彼岸でその家に言ったら、「やあ、和尚さん、ごころうさんでした」なんて、そのオヤジが外から帰ってきました。なんと、畑に行ってきたと言うんですよ。

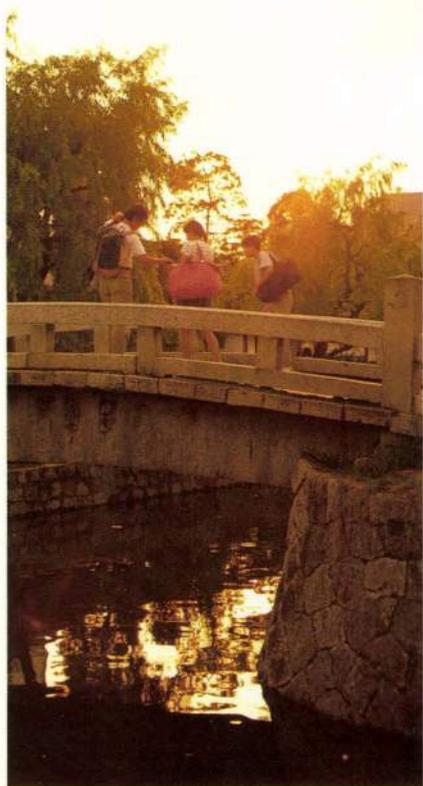
ところが、一年ほどたつて、息子が「オヤジがいよいよだめになりました」と言ってきた。聞くと、数珠がボロボロと切れたらしい。それでだめになったと言う。当人も、今度は極楽詣りができるから、和尚さんからいただいた数珠を自分と一緒に茶毘に付してくれと遺言しているという。その数珠を渡してから一年ちょっと、その間は丈夫でいたんです。

成田 その一年間が、すばらしい。

板垣 宗教の尊さというのは、そういうところにあるんじゃないかと思う。その一年間、当人は非常に充実した期間を過ごしましたから。

成田 おっしゃる通りですね。これをいかに大衆教化の中に組み入れていくか。これが研究所の一番基本的な問題になりますね。

板垣 百万遍知恩寺に『阿弥陀経』を彫った大きな石碑がありますね。この石碑



の『阿弥陀経』の中に今私達が唱えている阿弥陀経のほかに「二十一字多く「諸々の厄難を除かれて、諸々の福德を得る」という意味のことが書いてあります。これは私は前面に出している。念仏申すことによつて願わなくても厄難を除かれ、福德を得る。だから、しつかりやりなさい、と。

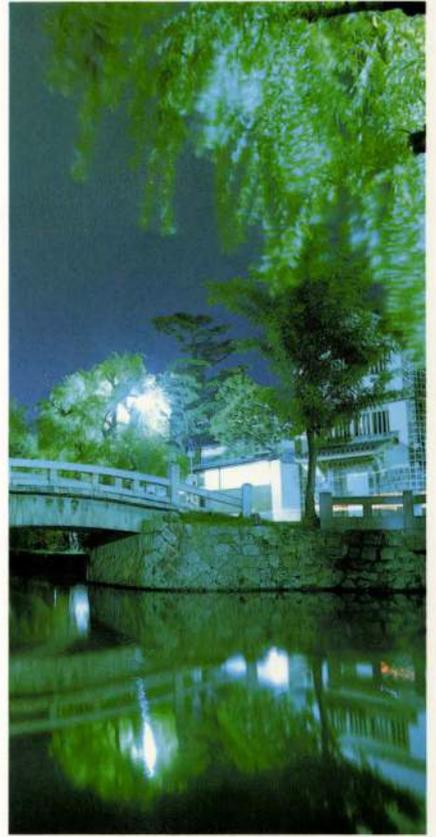
成田 津田先生、法式ということでは、

今のようなことを、いかがお考えですか。
津田 ヨーロッパの学者で、ガンの細胞は酸素中では存在できないが炭酸ガス中では長期間生きられ、一日に少なくとも三十回ぐらい深呼吸すれば増殖を抑えることが可能だと言っていたのがいたけれど、これを応用して、檀信徒に対して朝夕仏壇の前で十五回、二十回ゆつくりお念仏を称えれば健康維持、増進になると勧めるとか、法式家には、稽古の時、喉

を開いて本当の呼吸で発声するようにと指導しているわけです。

成田 お釈迦さんは「生老病死」ということをおっしゃっています。これは病と死は別のことだということですね。病の結果が死ではない。過去の聖人の足跡をたどると、立派な死というものがある。それは病の結果ではない。

板垣 極楽往生を法然上人はお説きになつているが、生の延長が死でなければならぬ。だから悔のない人生、生きていく間の念仏が大切。死後のことを考えるなら、生きている間にしつかり念仏をすることが、法然上人の真意ではなかったか。
藤堂 そういうふうな素直に念仏をとなえる人が、現世をいかに思い煩わずに生きるかという所にもつていくには、どうするか、それが、今後の課題の一つですね。



変化する社会の中で

●教化の方向をさぐる

板垣 今、日本には十数万もの宗教があるそうですが、なんでそんなにあるのかと考えると、われわれがこれまで強力に教化を進めてきたのかどうかと反省させられます。私の試案の一つですが、今、田舎のほうからどんどんと都会に人が来る。そういう人に私は両親の位牌をもたせて、浄土宗の寺がここにあるから、そこにお参りしなさいと言っているんです。そうすれば、いろんな宗教に迷わず、そこに行けるのではないか。これを全浄土宗寺院がやれば、大きな教線拡大になるでしょう。

竹中 今は人口流動化が激しいから、東京でも檀家が拡散して、遠くまで法事に

出かけざるをえない。おっしゃったように全国的なネットワークがあつて、どの地域でも浄土宗のお寺に行けるといえるけど、それはお寺のブロック制をとつて、檀家のブロックにはなっていないんですね。

成田 おととい千葉でお手つぎの大会がありましたね、千数百人の檀信徒が集まっています。藤堂先生、われわれ東の人間はお手つぎといってもピンとこないところがあるんですが、これは巨大な力ですね。竹中先生がおっしゃる信者組織といえば、今のところ、これしかない。竹中 そうですね。

成田 お寺に人を集めようと思っても、なかなか集まるものではない。「お手つぎ」というかどうかはともかく、なんらかの組織は必要ですよ。組織があつて、それが日常的に活動しているから人が来るんです。私の感じて言えば、西のほうはかなり強力な組織もっていますね。

藤堂 それと、関西では五重相伝をよくやります。

板垣 あれは大切です。東北でも、よくやります。

成田 非常に意義のあることだけれども、関東、特に東京ではたいへん少ないですね。非常に古くから行われてきて、よく知られているものだけれど、それを研究所あたりが取り上げてもいいんじゃないですか。

竹中 現代的なものとしてね。

成田 五重には教学・布教・法式のすべての面がありますしね。

板垣 以前、私のところでも五重相伝をやりました。組内の二千人を超す人が集まりました。収容しきれないので、一日三回に分けて、檀家を連れてきた人を唱導師にしてやった。これは非常によかつたと思う。そのお寺の和尚さんが唱導師を勤めると、檀家の人も喜んでくれますから。一か寺だけではなかなかできない面もあるし、そういうのも一つの方法だと思います。

成田 21世紀への教化といっても、まっ



たく新しいものを作り出すのではなく、伝統的なものをいかに生かしていくかという視点が重要ですね。

板垣 そうです。

成田 たとえば百人一首、全部かなで書いてありますね。あれは平かなを日本人に覚えさせる手段だったんですね。あれを作ったのは宇都宮頼綱、ご承知のように法然上人のお弟子で、実信房蓮生といった。これは大きな大衆教化の方法だったと思います。この百人一首を小学生の孫が一生懸命勉強しているんですよ。友達とやったけど、うまく取れなかったと言って『マンガ百人一首』というのを買ってきてね。そこに宇都宮頼綱もいっばい出てくる。これは立派な絵解きですよ。考えてみれば、われわれの先輩は、そういう大衆教化をすごくやってきたんです

ね。

板垣 『般若心経』を絵で表したのもあります。字が読めない人に絵で教えている。はじめは意味がわからなくても、触れているあいだにわかってくる。そこで、これからのわれわれの仕事としては、どんな方法があるだろうか。紙芝居のようなものも、これから研究していきたい。幼児だけでなく、年寄りも非常に喜ぶ。浄土宗でも研究して進めてもらいたいことの一つですね。

竹中 節談説教のような方法もあったわけで、視覚・聴覚、あらゆるものに訴えて教化した歴史がある。特に若い方に訴えるとなると、法要にしてもムードを盛り上げる仕組みが必要ですよ。それには法式の面でも研究しなければならぬ。

津田 今年の秋、増上寺を会場として縁

山声明とオーケストラの共演で公演会の予定があり、研究所所員各位の協力を願う次第です。

藤堂 それはたのしみですね。大阪教区ではすでに、ひかりを加えてやっています。そのように間口を広げることは好い。

板垣 それが時代即応ということですよ。藤堂 間口はいくら広げても結構ですが、お念仏が聴衆の心に入ってもらわねばいけないので、焦点はしばっておかなくてはね。

竹中 そのしぼり方は教学がやらないといけない。その上で、いかに間口を広げることかという事は布教と法式がやる。

成田 わかりました。短い時間の座談会でしたが、非常に方向性がはっきり出てきたと思います。本日はどうもありがとうございました。

所長	竹中 信常	〒141	東京都品川区上大崎1-9-24	隆崇院	03-441-8385
事務局					
事務長	佐藤 行信	〒248	神奈川県鎌倉市長谷4-2-28	高德院	0467-22-0703
書記	市川 隆士	〒144	東京都大田区東糀谷3-1-6		03-742-3487
総研担当	大辻 隆善	〒186	東京都国立市東2-19-53 青松荘10		0425-76-6274
教学研究部					
部長	藤堂 恭俊	〒605	京都市東山区林下町411	信重院	075-541-3933
主任	阿川 文正	〒107	東京都港区赤坂4-3-5	浄土寺	03-583-3630
研究員	香川 孝雄	〒543	大阪市天王寺区城南寺町5-16	蓮生寺	06-761-0710
	小林 尚英	〒287	千葉県佐原市佐原イ-1057	法界寺	0478-52-2855
研究部員	小野田俊蔵	〒653	神戸市長田区宮川町2-1	光堂寺	078-691-1893
	久米原恒久	〒350	埼玉県川越市連雀町7-1	蓮馨寺	0492-22-0043
	竹内 真道	〒522	滋賀県彦根市本町2-3-7	宗安寺	0749-22-0801
	渡辺 真宏	〒166	東京都杉並区梅里1-4-56	西方寺	03-311-6704
	長谷雄文彰	〒153	東京都目黒区中目黒5-24-53	祐天寺	03-712-0819
	鈴木 靈俊	〒373	群馬県太田市金山町37-8	大光院	0276-22-2007
	平岡 聡	〒630	京都市北区衣笠東御所ノ内町27-4		075-461-2383
		〒669-52	兵庫県朝来郡和田山町竹田995-1	法樹寺	0796-74-2448
	齋藤 舜健	〒692	鳥根県安来市安来町1927	西方寺	08542-2-3572
	善 裕昭	〒847	佐賀県唐津市東唐津2-8-23	安養寺	0955-72-5327
布教研究部					
部長	板垣 隆寛	〒995	山形県村山市楯岡晦日町4-41	得性寺	0237-53-2962
主任	宮林 昭彦	〒232	横浜市区南区三春台139	大光院	045-241-7676
研究員	三枝樹隆善	〒660	兵庫県尼崎市寺町6	甘露寺	06-411-3262
	鷺見 定信	〒253	茅ヶ崎市下町屋2-14-15	梅雲寺	0467-82-6060
研究部員	岸 一英	〒546	大阪市東住吉区枕全8-7-8	明法寺	06-719-6617
	小林 正道	〒105	東京都港区芝公園4-9-8	妙定院	03-578-8001
	佐藤 雅彦	〒113	東京都文京区向丘2-17-4	浄心寺	03-821-0951
	大室 照道	〒141	東京都品川区上大崎1-5-10	光取寺	03-441-8384
	長谷川岱潤	〒141	東京都品川区上大崎1-9-11	戒法寺	03-441-8971
	袖山 栄輝	〒380	長野県長野市西後町1568	十念寺	0262-33-2449
	安井 隆同	〒603	京都市北区紫野西蓮台町71-7 紫野スカイハイツ	西念寺	075-493-4399
	岸村 定浩	〒532	大阪市淀川区十三東1-13-16		06-304-3655
	水谷 浩志	〒471	愛知県豊田市土橋町8-6	法雲寺	0565-28-3965
	法式研究部				
部長	津田 徳翁	〒108	東京都港区高輪2-14-25	正覚寺	03-443-0071
主任	穴戸 栄雄	〒602	京都市上京区智恵光院通廬山寺上ル	真教寺	075-451-5001
研究員	福西 賢兆	〒105	東京都港区虎の門3-11-7	栄立院	03-431-0257
	熊井 康雄	〒135	東京都江東区三好2-7-5	龍光院	03-642-3437
研究部員	田丸 嶺弘	〒120	東京都足立区千住4-2-2 ダイヤパレス千寿504	正安寺	03-888-7214
	南 忠信	〒606	京都市左京区仁王門通大路西入北門前町471	大光寺	075-771-1635
	清水 秀浩	〒616	京都市右京区嵯峨鳥居本化野17	念仏寺	075-861-2221
	小島 伸方	〒250	小田原市本町3-13-53	無量寺	0465-23-1131
	中村 孝之	〒108	東京都港区三田4-7-20	大信寺	03-441-0664
	渡辺 俊雄	〒158	東京都世田谷区瀬田1-12-23	行善寺	03-700-3007
	小川 貫良	〒661	兵庫県尼崎市尾浜町1-21-1	光明寺	06-429-8458
	森田 孝隆	〒630	奈良県奈良市十輪院畑町12	興善寺	0742-23-7007
	八尾 敬俊	〒600	京都市下京区佛光寺通河原町西入富永町343-3	普恩院	075-351-3888



所報第1号の表紙を
 ソラマメの写真で飾ってみました。
 数十億年の生命の歴史をはらみ、
 さらなる生命へと受け継いでいく
 円環の接点に実をむすんだ種子の
 鮮やかなグリーン……。
 それは、教えを受け継ぐことの確かさと
 新鮮さを私たちに告げているかのようです。
 (撮影/尾之内勇武)



浄土宗総合研究所
 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
 〒105 ☎03(5472)6571(代表)

